

井上法子歌集

『すべてのひかりのために』

(書肆侃侃房)

この歌集は透明感にあふれている。登場するのは水、風、ひかりなど掴むことのできない透明な言葉たち、そして「にんげん」である。

にんげんのおろかなひとみ月をみてつきのひかりをわすれるばかり

何のことを歌っているのだろう。ヒントを作者のあとがきを探すと「非人称の世界で育まれる読みの豊かさを、ことばの可能性を、わたしは信じています」とある。短歌の向こうに生活者としての作者を探すのではなく、ことばをただ受け取り、そのリズム、その意味を味わえばよいということだろう。この歌については、人間の、大切なものほど忘れて何度も見ではその度に感動してしまうという虚しき性を表しているように感じた。確かに井上の歌に出てくることばは地域性や時代性から解き放されたプリミティブなものが多い。水、風、ひかり。自分にとってのそれらのイメージを持たない読者はいないだろう。井上の歌はあらゆる人々にひらかれている。こんな歌もある。

不得手を祭りマツリと聞きまちがえて花盛り 無恥 にんげんは  
ないものねだり

意味を落とし込めなくても、固着した現実を揺さぶってくる言葉とリズムの力に圧倒される。言葉の可能性に向き合い、言葉をことばへ昇華した一冊である。(岩館澄江)

伊藤一彦著

『若山牧水の百首』

(ふらんす堂)

白鳥しらとりは哀かなしからずや空の青海のあをにも染まずただよぶ

「すべては読者の想像にまかされている」と著者が言うようにこの有名歌は「白鳥」がどのような鳥であるのかは明かされておらず、また空を飛んでいるのか海に浮かんでいるのか分からない。そこを魅力としながらも著者は結局から「自らを貫く純粹さ」を読み取り、「哀しからずや」が感傷などではないと読者の認識に補助線を引いてくれる。ああ接吻くちづけ海そのままに日は行かず鳥翔まばひながら死せ果てよいま

野のおくの夜の停車場ていじやばを出でしときつとこそ接吻くちづけをか  
はしてしかな

著者はこの二首における「接吻」を比較して、前者では時間を停止させて一瞬を永遠にしようとしているが、後者では夜の灯のもとの一瞬の接吻であると指摘し若山牧水と恋人の園田小枝子の関係を讀みとく。

かんがへて飲みのはじめたる一合がふの二合がふの酒さけの夏なつのゆふぐれ

初句の「かんがへて」にはおかしみが含まれており、流れるような調べが気持ちいい。著者の鑑賞だけでなく若山牧水が友人にあてた手紙の内容なども引用されており、人物像が見えてくる一冊になっている。(松下誠一)